

研究雑話 (46)

人間発達の物質的基礎 (十) .. 知覚と行為、コースのブロック課業 (二つに分ける力の形成)

藤井力夫

今回は、「脳のなかにできる内なる他者」、「もう一人の自分」についてお話ししました。我々がなんらかの決断をせまられたとき、脳のなかのもう一人の自分と対話できるということ。「自我」の形成とはそうした「対話」ができることを意味する。瞬時でなくいろいろな経過があったとしても、最終的にはその人なりの譲れないところのものがあり、それをしっかり表明できるということ。これができればよいわけです。その人自身の生活史、とくに「他者」との関わりのおかげで形成されてきたものです。関係のなかで「こうありたい」と願う、脳のなかにできる「他者」。脳自身に形成の仕組みが存在するわけです。「自分流に生きる」というとき、それはまさにこの仕組みを尊重し、この仕組みに働きかけるということだと思えます。

これまで、脳の基本機能ユニット、様式特異性の減少の法則、定位反射の神経機序といった問題についての現代的な解答を用意してきました。発展の必然性は「構造」と「機能」の関係に求められます。脳神経系のうち主として前者の「構造」をめぐってお話してきたこととなります。

今回から、具体的な個々の「機能」をめぐってお話したいと思えます。できるできないではなく、できるようにっていく内的な必然性について説明していきたいと思えます。知能検査の場

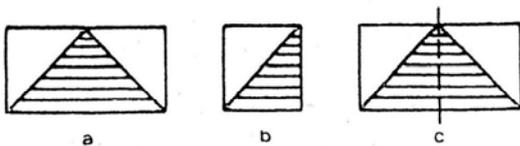
合、粗大運動、微細運動、言語、社会性などと分けられます。これでは諸機能を切り離しただけです。ここでは、「知覚と行為」、「ことばと叙述 (パラダイグマ)」、「ことばと叙述 (シンタグマ)」、「リズムと同期」といった機能間の関係、別個だが互いに不可欠な関係に注目してお話していきたいと思えます。最初は、「知覚と行為」。

まず、図Aを見ていただきたい。コースのブロック課業。知能検査では積み木模様、あるいはブロックデザインと呼ばれているテストです。積み木の面を組み合わせさせて図形や模様を構成する課

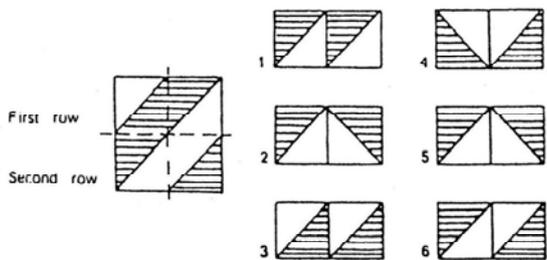
題です。通常、六歳前後になってできるとされています。なぜ六年もかかるのでしょうか。それは見たままでは作れないからです。「見たまま」の印象単位を「どう作るか」の構成単位に変換しなければならぬからです。この場合は、二つの積み木で一つの大きな三角形を作る。それゆえ左右の斜辺に注目するか、底辺を作るために直角を向き合わせる必要があるわけです。したがって、モデルを見て頭の中で左右の二つに分けることができなければなりません。ところが図B。左頭頂-後頭領の病変の患者さんは作ろうと思ってもなかなか作れません。図のように混乱してしまします。作ろうとする意志はあるのですが、どう作っているのか解らないのです。図Cが再教育プログラムです。どう分けるかの支え。これが重要です。

(北海道教育大学教授)

A. コースのブロック課業



B. 患者、L. (左頭頂-後頭領病変)の構成



41歳、女、1961年左頭頂-後頭領矢状平行面の腫瘍(髄膜腫)、除去手術。典型的な頭頂-後頭下部症候(空間定位障害、計算と論理・文法的操作困難、意味失語症)。

C. 再教育プログラム(A. R. LURIA)

- ① モデルの1列目を見なさい。
- ② 下の2列目はかくしなさい。
- ③ 1列目の横線図形を指しなさい。
- ④ この図形を描きなさい。
- ⑤ 二つの三角形からできていることに注意しなさい
- ⑥ 二つの三角形でモデルを作りなさい。
- ⑦ 次のような直角の向きに注意しなさい。
- ⑧ 2列目も同じ要領で作みなさい。

